

郷土資料の散歩道

図書館郷土資料室
☎21-6111 内線6201



樹養篇

竹俣当綱が記した漆・桑・楮の百万本植立計画書の

今回「竹俣家寄贈文書」(市立米沢図書館所蔵)の中から「樹養篇」を

紹介します。この計画書を著した竹俣当綱は鷹山が藩主となった時の奉行(国家老・三人体制)の一人で、鷹山を補佐し前期藩政改革を主導した人物です。

計画の内容は、困窮した藩財政や領民を救う方策として領内に漆・桑・楮の木各百万本を植え、各木より出る収益金によって米沢を豊かにするというもので、植える場所や資金調達方法まで記されています。

「樹養篇」が書かれたのは安永四年(二七七五)六月、九月には樹芸役場を設置し植立が開始されました。竹俣が最も期待したのは漆の木で、農村はもちろん城下の侍屋敷・町屋敷や寺の空地にまで、一軒につき何本ずつ植えると細かい指示がされています。



▲漆木百万本に続き実の収穫高22万222俵、利益1万9057両(次頁)と記されている

漆の木の実には蠟燭の原料

さて、漆の木から何の利益を期待したかという点、漆塗りではなく、漆の実から蠟燭を作り江戸に輸出する利益でした。漆の木には男木と女木があり、女木には秋に房状の小さな実が付きます。その実を集め、蒸して絞った蠟(木蠟)から蠟燭を作りました。

この漆蠟にかけた竹俣と鷹山の思いは、小説ではありますが藤沢周平氏の遺著となった『漆の実のみる国』に巧く記されています。

歴史的にみれば、漆蠟は米沢藩の特産物として藩財政の柱の一つとなりましたが、西日本で作られた燻蠟(ウルシ科のハゼノ木から作る)に押され、竹俣の期待する程には至らなかったといえます。一方、三木の一つ桑の木は、養蚕、さらには米沢織へと発展し、農村復興および藩財政回復の原動力となりました。

竹俣の数々の提言書

「竹俣家寄贈文書」の中には「樹養篇」の外にも、多くの竹俣当綱の提言書類が残っています。政治改革や経済政策を論じた「国政談」や「治生談」は著名です。また、竹俣失脚後に書かれたものも多く、その中には鷹山の政

策を批判した意見書も見受けられます。提言書類は、特徴ある大きな文字で堂々と書かれる一方、一字一句再確認した朱点も見られ、竹俣の大胆かつ緻密な性格も窺えます。こうした意見書類は、米沢藩の藩政改革を調べる上で大変貴重な歴史史料となっています。



▲竹俣が書いた数多くの提言書類(一部)

郷土資料の小径

新着郷土資料の紹介

◆◆『前田慶次』◆◆
今福匡著 新紀元社

「かぶき者」として有名な武将前田慶次の生涯を、希少な資料を丹念にあたり、詳しくかつ平易に紹介しています。

慶次の亡くなった場所は、はたして米沢堂森か、大和か？